

バレエ評論家・薄井憲二のソ連体験

——シベリア抑留とモスクワ平和友好祭の思い出(下)——

半谷 史郎

半谷：いつも話に出るのが、ナホトカでの歓迎ぶり。すごい人出で、もみくちやにされたという話が出ます。

薄井：ナホトカはそんなにいなかった。途中が大変。

半谷：そうなんですか。

半谷：これは、八木下さんという同行された写真家が撮られたナホトカの写真です¹⁾。これはナホトカでよね。途中の駅も写っています。

薄井：ナホトカはそうだったのかもしれない。ナホトカはそのとき Тихоокеанская という駅があって、船が着く岸壁の所がもう駅なんです。

半谷：着いてそのまま電車に乗れるようになっている。

薄井：そうそう。船の中で番号を渡されて、荷物にこの番号をつけて下さいとタグも渡されて。そうすると、放っておけば汽車の中に置いてくれます。ロシアにしては手際がいいと思ってびっくりしました。その番号はずっと付いて回るんです。

半谷：最後まで、モスクワまで。

薄井：ええ。だから、放っておけば駅からホテルまで荷物は届く。帰りもそうだし、汽車もずっと。ロシアにしては非常に手回しがいい。だからナホトカは、そんなに人がいる場所はなかったような気がする。チーホアケアンスカヤの次がナホトカかな。

半谷：分かりました。薄井さんの回想録で面白かったのは、他の日本人が住民の歓迎ぶりに驚いたと口を揃えて言うのに、こういう素朴なロシア人は私にはおなじみであるを書いてあって、抑留の経験が効いている。

薄井：ナホトカがどうしてそれほどじゃなかったと思うかということ、ホームに水兵が2人いたんです。それは変でしょう。私の記憶では、周りに誰もいないで水兵が2人いただけなんです。

ちょっと話をしたら、水兵が1ルーブルくれました。新潟まで来て泊まったりしたので、私は一銭もお金がなかった。外貨交換があるけれど、交換

すべき円はもう持っていなかったんです。でも、番号札は付いて回るし、ロシアの事情は分かっているから、一文無しでもあんまり恐ろしくない。そうしたら2人の水兵が1ルーブルくれたの。

だから、それで切手を買って、絵はがきを買って、パレンスキーに手紙を書いたんです。汽車の中から書いたの。平和友好祭のためにモスクワに行くよ、何日から何日までだよと言って出したんです。そしたら、どこに泊まっているか探し当てて訪ねて来てくれた。彼は休暇でソチに行っていた。だけど、うちからはがきが転送されてきたんでしょう。休暇を切り上げてモスクワに会いに来てくれたんです。

群衆はどこに行ってもすごく大変でした。本当にそのとおり。だから、チーホアケヤンスカヤの次のナホトカだったかもしれないです。ナホトカは昔からちゃんと駅があるんだもん。私のいたとき〔抑留時〕は港の岸壁に着くだけで、チーホアケヤンスカヤなんてなかった²⁾。

もしかしたら、水兵だからいられたんで、チーホアケヤンスカヤはイミグレーションの先かもしれない。どこかで国境を越えているはずでしょう。国境と言ったらおかしいけれども。

半谷：入国審査は絶対しています。

薄井：だから、それはチーホアケヤンスカヤで済んだんでしょう。ナホトカの駅は国内だから、それだけ人がいたの。

半谷：キスをされた、花束をたくさんもらった、握手攻めにあった。そういう話はいろいろ聞きますよね。

薄井：そうよ。それから、300キロの奥から来たという人もいたよ。

半谷：外国人は珍しいから見に来たんでしょうね。

薄井：そうそう。私も文藝春秋に書いたかな、みんな何かを、プラトークとか、ちょっとしたものをくれるわけ。自分の眼鏡をくれたおじいさんもあるもん。だから、素朴なロシア人なの。人にあげたいの。

半谷：薄井さんはロシア人ならこうすると分かっているが、他の人はそうじゃない。

薄井：初めてだから。

半谷：ロシア人はこうなんだと周りの人にしゃべりましたか。

薄井：他にいろんなことがあったから、それは覚えていません。

半谷：そうですか。一行には通訳が5人ぐらいいましたが、ロシア語が分かる人は一般の参加者にいたんですか。

薄井：いなかったと思います。だから、通訳が足りなくなる。ある駅では歓迎の人が来て、われわれも出て、向こう側がスピーチをしてお返しに何か言わなきゃならない。そのときに私は1回だけ代わりにお礼も言ったし、こちらのスピーチも通訳したことがあります。

半谷：ちなみに、ロシア語が分かったのでお伺いしたいんですが、ロシア人がやってきて、当然、何か話しかけてきますね。そういうときに何を言うんですか。よく来てくれたとか、そういうことなんですか。

薄井：割合、普通のこと。〔日本側に〕写真を撮る人がいっぱいいるから、写真を送ってくれないかと住所をもらったりする。だけど、そこまで手が回らない。悪いことをしたと随分長いこと思っていました。

半谷：そこまでは無理ですよ。行く直前にあった旅券闘争のことをロシア人はしゃべっていましたか。

薄井：それはなかったと思う。

半谷：ないですか。

薄井：彼らは知らなかったと思う。でも、一番人が大勢いたのはモスクワの駅ですよ。モスクワの駅は3つぐらい向かい合っているでしょう。われわれはどこへ着くの？

半谷：ヤロスラヴリ駅です。

薄井：その群衆に一番びっくりしました。柵ができて近寄れないようになっていたけれども、площадь〔広場〕ができて、забор〔柵〕があって、向こう側に歓迎の人がすごい数で立っていた。あれが一番多かった。

半谷：なかなか冷静ですね。他の方はナホトカがすごかったで、もう全部終わるんです。

薄井：ヤロスラヴリの駅前が一番大変でした。

半谷：そうすると、逆に開会式に間に合わない、遅れてきた人だからと、特別の歓迎があったのかもしれませんがね。

薄井：そうですね。

半谷：大会の2日目ですからね。ところで、シベリア鉄道の移動中は、基本的に何をされるんですか。

薄井：ごろごろしているだけ。私が気が付いたのは、生活は、食事とかそういうものは汽車の時間で行われている。だけど、現地の時間とはずれている。

半谷：汽車はモスクワ時間で動くので、ずれますね。

薄井：そうそう。でも、モスクワ時間で食事とか、そういうことはやらなかった。勝手な自分たちの時間でやっているわけ。だから、現地の時間に近いかもしいです。

半谷：おひさまがこの辺だから食べようという訳ですね。コンクールに出る人が多いので、行きの列車はその練習をしなかったんですか。

薄井：列車の中で？ できない。だって2等車だもん。

半谷：こんな映像があります³⁾。日舞の練習をされている。これは列車かなと思ったんですけども。

薄井：これは日本舞踊の人だね。でも、汽車の中でした覚えはないです。

半谷：ないですか。

薄井：船の中で体操の人が、バレエのクラスを一緒にさせてくださいと来たことはある。私がバレエのクラスをしたら、日本の舞踊の代表団の人はみんなモダンダンスだから、バレエができない。だから、体操の人はびっくりしていました。あれがどうして代表なの、下手じゃないって。

半谷：スポーツの人と移動中に交流があったんですか。

薄井：うん。

半谷：船だと、スポーツの人は1等船室にいて別世界の人だったという話も伺いましたけれども。

薄井：別世界でもないでしょう。私は知り合いになりましたよ。

半谷：そういえば、文藝春秋の記事に田沼さんのことが出てきます。

薄井：写真家の田沼さんですね。3台ぐらいカメラを提げていました。

半谷：割と早くお知り合いになられたんですか。「田沼さんを救いだし、写真が撮れるような所に連れて行ってあげようと思った」と。

薄井：田沼さんはバレエの写真も撮るから、前から知っていました。

半谷：そうなんですか。沿線の駅に着くと、芸術代表はソーラン節を踊ったと書かれています、ご記憶は？

薄井：ソーラン節？ やりました。でも、私はちゃんと覚えられないから、いつもみんなと違っていて叱られました。それから、ポリショイ劇場の小さいステージ、ペートーベン・ホールという所でソーラン節をやることになった。私はバレエでポリショイ劇場の人と話しているわけでしょう。だから、ソーラン節をやるのは恥ずかしいから出ませんと言って非常に怒られた。でもプライドが許さないから、ソーラン節は出なかった。

半谷：私はバレエですと。ほかに沿線の駅で止まったときの思い出で言う

と、ダンスをさせられた人がいます。フォークダンス。

薄井：いや、フォークダンスじゃなくて、ボールルームダンス。

半谷：普通のロシア人が相手をして。これはあるんですか。

薄井：あります。私も一遍、女の人と一緒にして、終わったときにロシア人がするようにほっぺたにキスして別れたら、後で問題になりました。芸術代表には無理やりキスするような人がいてけしからんと。

半谷：労働組合から文句が出た。

薄井：もちろん組合の人。そういうことを言われました。私と名指しでは言わないけれど、私かもしれないと思っていました。あれは挨拶でみんながするのにな。

半谷：普通の挨拶ですよ。

薄井：ロシアでは。

半谷：でも、知らない、と思うかもしれません。

薄井：大体、船の中が大変でしたもん。まず、トイレの使い方を知らない。だから、あつという間にめちゃくちゃな状態になった。ロシアの人も掃除できない。どうしたらいいかわからないから放ってあって、とても大変でした。それから食堂は水が出ない。ガス入りのミネラルウォーターしかないんです。газовый。みんなそれが飲めない。

半谷：普通はそうでしょうね。

薄井：だから、水をもらってくれと言うけれども、水はないわけ。積んでないんです。

半谷：日本で言う水はないということですね。薄井さんは、食事の苦労はなかったですか。食事で苦労したという思い出話が結構あって、例えば黒パンが硬くて食べられなかったとか。

薄井：それはないですね。[モスクワでは]みんなビュッフエでした。ホテルと別に палатка〔仮設テント〕が出て、そこが食堂になっていてビュッフエです。セルフサービスです。そこでわれわれは期間中に1回だけ красная икра が出たことがある。日本でいうイクラ。石澤くん〔スポーツ大会に出場したレスリング日本代表〕に後で聞くと、スポーツのほうは毎日キャビアだった。

半谷：キャビアですか。差がついていますね。

薄井：だから、後でもう手遅れだけれども、帰ってきてから怒るわけ。それから、石澤くんは名物だと言われて幾つか買って帰るわけです。でも、

食べたことがないから、うちの人は食べられない。においがするから臭いと言って、食べなくて捨てたそうです。もったいない人だと思った。

半谷：食事も文化ですから。

薄井：そう。そういうことで困った人はいるかも。

半谷：でも、薄井さんは困ったことはないんですね。

薄井：ええ。勝手に行動するから、さっき言ったようにパスがあるから、暇なときは自分であちこち行って、食事の時間もずれて行く。意地悪なおばさんだと、今ごろ来てと言って怒ってなかなかくれない人もいた。

練習があつて時間どおりに食べられないのは怒られなかったので、練習だったと言ったら、男の人で、じゃあ、おまえはどんなスポーツをしているのかと聞かれた。そのときは練習という言葉は、舞台のときはрепетиция と言うことを知らなくて、そこで気が付くわけ。

半谷：使う単語を間違っていたんですね。

薄井：パラトカの食事のときは、面白いことが1回起こりました。食事時だから、みんな並んでいるでしょう。そのときに私の前にいた人がモンゴルの人でバンガンというんです。

半谷：文化省のお役人だったとかいう。

薄井：文藝春秋に書いてあった？

半谷：はい。ピュッフエで並んでいる時なんですね。

薄井：そうなの。バンガンはロシア語を話すから話を通じるようになって、いろいろなことを言っているうちに、私たちが文化代表で来ていることが分かるから、帰りにウランバートルに寄ってくれないかという話になる。

半谷：それは、2週間ぐらいの大会期間中の、いつですか。

薄井：1週間くらいたった真ん中辺り。結果も全部、書いてあるの？

半谷：いろいろな人から話は聞きました。最後の日は閉会式に出ずに、みんな徹夜で議論になったとか。

薄井：そうですか。

半谷：閉会式は、日本人が誰も出ていない。徹夜でぐだぐだになっている写真も見せてもらいました。

薄井：私のバージョンは、まずそういうことを言って、ウランバートルでコンサートをしてくれれば（2回ぐらいのコンサートでいいようなんです）、ちょっとお礼もするし、汽車賃は払うし、北京まで送ります。北京から後は中国の代表団とお話ししてくださいって。だから、中国の代表団

の団長に話をしに行っただけです。女の人でした。私は込み入った話になったら英語のほうがいいから、英語を話しますかとロシア語で聞いたら、「あなたは英語で話してください、私はロシア語で答えます」なんです。向こうは中国語だったらいいなと思っているでしょう。仕方ないからそれでやった。彼女はいろいろ考えて、その場で即答したんだから、権力のある人なの。

半谷：そうですね。上のほうの人ですね。

薄井：北京に来たら北京の観光はして差し上げます。それから、今は訪問の代表団が非常に多いので舞台は出てもらわなくて結構です。泊めて観光させてあげて、帰りは香港まで送って、香港から東京までの飛行機の切符も負担しますと。

半谷：いい話です。

薄井：すごくいい話。プークの人〔川尻泰司⁴⁾〕がわれわれのボスだったから、話をしたわけ。そしたら、みんなとても大喜びで、全体に話を持っていった。でも、組合の人がカンカンに怒って、まず別れて行くななんて統制が取れないから駄目。そのうえ舞台に出てお金をもらうこじき根性は何事だと言われた。何も知らない人なんだと思ったけれども、それで駄目になったんです。だから、随分早く駄目になったんです。

半谷：そうですか。

薄井：私はずっと後までその話は忘れなかった。中国のバレエ界と仲良くなったときに1人仲がいい人ができた。その人はロシア生まれなんです。だから、お互いにロシア語で話すだけけれども、その人に、北京からウランバートルまで車で行こう。帰りにモスクワに行って、またモスクワから帰ってくる。私が全部払うから一緒に行きましょうって言ったの。そうしたら、それは大変だから、内モンゴルに連れて行ってあげると言うわけ。ウランバートルに行かなくても、中国にもモンゴルがあるんだから、中国のモンゴルを見たらいいじゃないかって。仕方ないからそうしましたが、本当はウランバートルに行きたかった。ウランバートルに車で行くというのはちょっといいじゃない？ 砂漠を渡っていくでしょう。

後でウランバートルにもバレエの知り合いが何人もできました。だから、行こうと思えば行けたけど、やっぱりバレエで生きていくのは大変で忙しかったから、時間がなかったです。

半谷：分かりました。いろんなお話が出てきましたが、モスクワの話では、

一応コンクールのことをお聞かせ下さい。メインは、特にモダンの人はコンクールに出ることが大事な仕事だったはずですが、薄井さんは助っ人で出たんですね。

薄井：コンクールには出ていない。

半谷：出ていないんですか。

薄井：だって、あれは個人参加だもん。

半谷：じゃあ、薄井さんの仕事というか、あちらでやったのは8月3日にワフタンゴフ劇場であった「日本の夕べ」のガラプロ・コンサートですか。

薄井：コンサートはもっと幾つもあった。

半谷：ということは、テレビの放映とかですか。

薄井：テレビもあったし、公園の野外劇場でもあったりした。

半谷：そういうのもあったんですか。

薄井：ええ。オスタンキノ公園。

半谷：コンクールとは別に、友好祭の催しということで幾つか入っているのですか。

薄井：幾つかありました。

半谷：その際に薄井さんが踊られるのは何ですか。

薄井：ソーラン節でしょう。それから、鬼剣舞。

半谷：ここに書いてあるのは鹿踊り。

薄井：そうそう。それが大変なの。シカの角みたいなものをかぶってやる。

半谷：薄井さん、実は鹿踊りとおぼしき映像を見つけました。しかも多分、薄井さんが踊っていらっしゃる映像です。

薄井：本当？

半谷：57年の平和友好祭のときの記録映像の中の1つです⁵⁾。

薄井：記録映画は見たことがないんです。記録映画は日本で、組合か何かで公開されたの。

半谷：入ってきたのは確認しています⁶⁾。それとは違うものです。これが鹿踊りじゃないかと思うんですが。

薄井：これです、これです。これはとても成功したの。みんなが褒めたの。でも、こんなものはしたことがないから覚えるのが大変よ。

半谷：男性4人のどれかが薄井さんですね。

薄井：どれかが私よ。これはもう終わりのほうだね。

半谷：ええ。これは部分なので。

薄井：これはテレビじゃない？

半谷：テレビなんですか。テレビ用の映像ですか。

薄井：うん。これが大変なのよ。角で床をたたかなきゃならない。どれかが私だ。これじゃないかな、今のが。なんでかという、これ〔お面〕を上げて笑ってくださいと言われたもん。

半谷：そんな覚えまであるんですか。

薄井：だって、上げてニコニコしてくれと言われたんだもん。多分これです。あとは工藤と江崎司と三上弥太郎でしょう。

これが組合関係かなんかで見せられたの。そのときに誰かが、薄井さんの大映しが出ますと言っていたの。現場で知っているテレビの人にそう言われたから、見たいと思ってモスクワの人にも言ったし、映画関係の人にも言ったし、バレエでは鈴木晶という法政の先生。あの人が映画にいろいろ熱心な人で、ロシア語もできてロシアと関係があるから、探してくれと言っているんだけど、なかなかなかった。よかった。

半谷：ということで、偶然ですが見つけました。

薄井：テレビ出演のことはもう一つ話があって、私はもちろん書かなかったし、誰にも言ってないはず。終わったら出演料が出て、そこで初めて私はロシアのお金がポケットに入ったんです。

半谷：700ルーブル、結構なお金だったと書いてありました。

薄井：結構なお金よ。会計の人が払いに来て、ディレクターは誰と聞いわけ。ディレクターはいないでしょう。だから、ディレクターが必要なら、私をディレクターにしていよいよと言ったら余分にくれたの。だから、余分にもらって、あとは1人ずつ決まった額をあげて黙っていました。

お金がポケットにない時分、着いてすぐの頃に、ちょっとした時間ができたんです。バスを降りて通訳か誰かに、古本屋がこの辺にないかと聞いたんです。

半谷：やっぱりやっていらしたんですね。

薄井：そうよ。

半谷：当然ですね。

薄井：古本屋に行ったの。そしたら、Современный балет という豪華本があったんです。それを私は日本で見ているんです。神田の坂を下りていくと一番角にある東書店のウィンドウに長いこと出ていたんです。それは多分、350円ぐらいした。初任給が80円ぐらいの時代だから。

半谷：すごい額ですね。

薄井：だから、とても買えない。でも、その本の存在は知っていたの。東勇作が持っていたから、ちらっとは見ているわけ。東書店で何遍も見ただけけれども、ある日、入って行って店員にウインドウにあるあの本を見せてもらえるかと言った。まだ高校生のときだから買わないに決まっているじゃない。

半谷：決まっています。ひやかに決まっています。

薄井：だけど、店員はちゃんと出してくれて、私は喜んで全部見たもん。こんな厚い本を1ページ目から全部見て、どうもありがとうございましたと返したけれども、その『ソヴレメンヌイ・バレート』が古本屋にあった。その本屋で売っているのはフランス語バージョンでした。値段は忘れただけれど、〔手持ち〕ゼロなんだからどうせ買えないでしょう。だから、覚えていないの。それで、テレビ出演の後に、急いでその古本屋まで駆けていった。

半谷：どうでした？

薄井：もう売れていた。

半谷：残念でした。

薄井：でも、後で、ニューヨークで、800ドルで買いました。

半谷：まずまず。

薄井：まずまずです。古本市に出ないことはないけれど、今だったら3,000ドル以下はない。

半谷：お金ができた後に、古本屋は当然また行かれましたよね。何かは買っていますよね。

薄井：ちょっと買った。あれも多分、古本屋だね。チャブキアーニというグルジア出身の男の大舞踊家がいたんです。キーロフ劇場の人です。その彼についてのバイオグラフィーみたいなものが、そのとき出たばかりで積んであったんです。だから2冊買って、1つは自分用、1つは帰ってから蘆原英了さんにあげた。たいしたお金じゃないです。新本は安い⁷⁾。

半谷：安いですよ。自由行動の間は結構いろいろな所を回られていますけど、どこに行かれましたか。

薄井：モスクワ大学。

半谷：新しい建物ができたばかりですね。1953年だったかな。

薄井：そう、そう。階段を見つけて一番上の屋上まで上がった。なんでそ

うだったかということ、コンクールがあったでしょう。コンクールのときに、私は手伝いでモダンダンスに出る人に付いていくわけです。

そしたら、楽屋にフランス人の男の子がいて、ドン・キホーテのソロを踊ったんです。私は袖で見ていた。割合、上手だった。だから、帰ってきたときに、ソロはいろいろなバージョンがあるけど面白いバージョンだった、いいバージョンだね、私も何種類か知っているけれど、あなたのバージョンはとてもよかったと言ったんです。それでちょっと話をするようになって、フランス生まれでフランス国籍だけれども、人種的にはロシア人なんだと言って、アンドレ・プロコフスキーという人でした。ロシアでいえばアンドレイです。

そのときは18だったんです。パリの個人のスタジオで働いていた。明日、遊びに来ないか言われた。ホテルはどこかも聞いたので、原爆反対の儀式を抜けだして。

半谷：8月6日にあったやつですか。

薄井：それを抜けだしたの。駅の広場のそばにあるレニングラードホテル、あそこに会いに行って、彼と一緒にご飯を食べようと。食事券はどこでも通じたから。

半谷：そうだったんですか。

薄井：われわれはパラトカだったのに、彼はちゃんとレストラン。ホテルのレストランでシャシュリクを頼んで、私の食事券で払えた。それから2人でモスクワ大学に行った。彼は若いから平気で一番てっぺんまで登るわけ。私は高所恐怖症だからとても困ったけれど、仕方ないから付いていった。

半谷：階段ですか。

薄井：全部、階段よ。

半谷：50階とは言わないけれど、結構ありますよね。

薄井：結構ありますよ。柵のないテラスみたいな所にも出たんだもん。人間が入っちゃいけないような所に。あれはよく捕まらなかったよね。

半谷：すごいですね。

薄井：そこでちょっと踊りを踊ったりして、バレエのポーズしたりなんかして帰ってきたら、彼の知り合いのイタリー人のジャーナリストのグループに出会ったんです。それと一緒に帰ると言うんで、彼のガールフレンドなのは一目瞭然だから、じゃましちゃ悪いと思って、私はどこかの団体の

車に乗せてもらって中央まで帰って、後はメトロでうちに帰った。それもこれも言葉ができるから。

アンドレ・プロコフスキーは、後で一流の舞踊家に成長します。ニューヨーク・シティバレエのスターだった。

半谷：その後もお会いになっていますか。

薄井：何遍も。とても仲のいい友達です。現役を退いてからは振り付けもしています。『アンナ・カレーニナ』がとても成功した。オーストラリア初演なんですけど、とてもいいバレエで、今、日本にも残っています。大阪の人が装置、衣装、楽譜を持っていて、いつでも上演できる状態にある。

本当ならこういうものはロシア人がするものなのに、キーロフ・バレエのディレクター、オレーグ・ヴィノグラードフが西側でそれを見てとてもびっくりして、こんないいバレエはロシアにないと彼に言って、キーロフ・バレエで上演するようになります。その初日に私は押し掛けていった。キーロフ・バレエはそんなに親しくないから、招待状はなかったけれども。

半谷：他の方とは、やはり違いますね。

薄井：だから、あそこ〔モスクワ〕で生涯の友達ができた。でも、私より先に、5年ぐらい前に〔2009年に〕亡くなりました。彼は18のときにイタリー人のジャーナリストのガールフレンドがいたでしょう。2年ぐらいして小さなグループで日本に来たら、もう別なガールフレンドがいるの。

それから後に3回、結婚するんです。1回目の結婚の奥さんは、バレリーナ。キエフの人で、ソ連時代にカナダ人と結婚して合法的に国を出た人なんです。ソ連で教育を受けたバレリーナなんて外国にいれば大変な貴重品だから大スターになって、2人の大スターが働いていたから、70年代に2人で250万円ぐらいの月給だと言っていました。

だから、お金がたまってロンドンに家を買って、それからフランスの別荘地にも家を買ってあって、2軒あったんです。ロンドンのうちは室内プールがあるようなうちです。私はロンドンで何遍も泊めてもらった。奥さんとも仲良くなった。ロシア人だし、英語もできるし。でも、彼女はだんだんロシア語がとても下手になった。

それが最初の奥さん。離婚するときにロンドンの家は失うわけ。自分はフランスの家を取った。でも、2度目の結婚も破綻するから、フランスの家も彼女に取られてゼロになってしまうわけ。パリにアパートを借りて住んでいたけれども、そのアパートにも泊めてもらったし、鍵をもらって住

んでいたこともあります。フランスの鍵はやりにくいから私はいつも閉めなかったけれど、泥棒に入られなくてよかった。

ついにだんだん困ってきて、ニースの山の上のアパートに引っ越すんです。それがエレベーターのない家だったから、だんだん駄目になって下のほうに来て住んでいたんですが、最後は痛風だったのかな。5～6年前に亡くなりました。最後はかわいそうだったけれども、歴史に残る人になったからよかったです。

半谷：平和友好祭の出会いでいうと、その方が一番大きな出会いですか。

薄井：そうですね⁸⁾。

半谷：後に続く人間関係でいうと他にはありますか？

薄井：ソ連人だからあまり仲良くならなかつたけれども、ナタリヤ・カサートキナという人がいる。1957年のボリショイ最初の〔来日〕公演のときに『さくらさくら』を踊るんだけど、知っているのは『さくらさくら』という名前だけで、曲も踊りも知らない。誰かがそれを決めたわけ。

半谷：やれと。

薄井：ええ。だから、ワフタンゴフ劇場で〔8月3日に〕やったと書いてあるでしょう。そのときに楽屋に訪ねてきました。ロシアは楽屋の入り口が非常に厳重だから、楽屋の中に入れない。とにかく舞踊の話で来ている人がいます、誰か対応してくださいと言われて私が出ていったらナタリヤ・カサートキナで、『さくらさくら』を踊るんだけど、楽譜もないし、踊りも分からないから、まずは楽譜が手に入らないでしょうかって。だから、私は鈴木巖さんに聞いて。

半谷：採譜を鈴木さんにしてもらった。

薄井：だって、あんなの簡単にできるでしょう。だから、その楽譜をあげて、それから代表団にいた花柳寿二郎さん。寿二郎さんは民族舞踊のコンクールの審査員で来ていたでしょう。だから、寿二郎さんが振りを教えてあげて、彼女はそれで用意をして〔来日公演のときに〕踊るわけです。

半谷：その後もお付き合いはあったんですか。

薄井：ずっと長いことありました。あの方はボリショイ劇場の団員でソリストだったけれど、大バレリーナにはならなかつた。中堅で、バレエの用語でいえばキャラクターのほうなんです。美人で姿もいいんだけど、どうしてもドゥミ・キャラクター。旦那さんはウラジーミル・ワシリョーフというんです。ウラジーミル・ワシーリエフという有名人がいるけれど、

その人と名前が同じなのでワシリョーフを名乗ったんです。

半谷：アクセントの位置を変えたんですね。

薄井：独立してモスクワ・クラシック・バレエという団体をつくったんです。ソ連時代だから大変なことですよ。よっぽどこかにコネがあったんでしょう。そうでなければ、そんなことができるはずないもん。

でも、ワシリョーフはお酒を飲むだけの何もできない人だった。カサートキナは全部1人でやっていたんだけど、そんなに才能があるわけじゃない。外国公演もあって、私はロンドンにわざわざ見に行つて会ったりもしています。労音に紹介して、労音の高田さんという人が代表。この人が定期的に呼ぶようになって一息つけた。モスクワ・クラシック・バレエはまだ存在するの。今年、来るの。来年かな。今、日露芸術何とかというプロジェクトがあつて1年中やっているでしょう。

半谷：やっていますね。

薄井：あの中に入っているの。それから、去年〔2016年〕、カサートキナにちょっと会いました。私が「踊りの魂」賞をもらったでしょう。そのときに彼女も賞を誰かに渡す役で来ていた。私に賞を渡すのはモスクワのバレエ学校の校長先生だったけれども、カサートキナも誰かに賞を渡すために来ていたからちょっと会つて、あなた今年、日本に行くのなんて言つて、ちょっと話しました。付き合いがないことはないんです。

半谷：先ほどのアンドレ・プロコフスキーのほうがすごいですね。

薄井：プロコフスキーは、オーストラリアの初演もぜひ来てと言うので見に行つたし、香港にも来たし、シンガポールにも来た。広東にも来たけれども、広東のときは行かなかつたな。香港とシンガポールでも会っているし、ロンドンのうちには何遍も行つたし、パリのうちもニースのアパートにも行つた。

半谷：ずっと付き合いがあつたんですね。

薄井：それが〔モスクワの〕フェスティバルから始まっているんだ。

半谷：大事な出会いですよ。ちなみに、バレエから離れますけれども、モスクワの印象はどうでした？ モスクワは初めてじゃないですか。

薄井：そうですね。まずトロリーバスを見たことがなかつたから、トロリーバスはこういうものなんだと思いました。それから、地下鉄がとても深いし、エスカレーターがとても速いので、あれはびっくりしました。それに、ご自慢だったけれども、各駅のデコレーションが違うでしょう。そういう

のが印象的でした。

半谷：街中の雰囲気はどうですか。

薄井：街中の雰囲気は友好祭だから、みんなニコニコしているよね。

半谷：友好祭だからというのは何となく思いましたか。

薄井：それはそう思いました。だって、ある程度、不幸も存在するでしょう。例えば、トロリーバスで一緒になったおぼさんに、57年の帰りに дай мне рубль〔1ルーブルおくれ〕と言われたことがあるもん。だんだん思いだしてきた。物資が不足なんだと思った。私は夏だからアロハを着ているわけ。そしたら、それを売ってくれと言う人がいっぱい現れた。転売するんでしょう。

半谷：売ったんですか。

薄井：売らなかった。売らなかったけれども、ロシアのウクライナ風のルバシカと交換した。それは多分、2枚ぐらいしました⁹⁾。

半谷：お店の品ぞろえはどうでした。土産物を買うのが大変だったという話は聞きましたが。

薄井：割合、高いのよ。

半谷：高いんですか。あまりいいのはない。

薄井：私の兄に子どもが生まれて3歳ぐらいの子がいたから、ウクライナ風ベビー服を買ったけれど、そんなに安くなかったです。それから、漆細工の何ていうんですか。

半谷：ホフロマ塗ですか。

薄井：そうかもしれない。めちゃくちゃ高いの。バレエ〔の絵柄〕があったんです。Лебединое озеро〔白鳥の湖〕なんですけど、高くて買えない。

半谷：たくさん稼いでいても。

薄井：うん。問題外に高かった。200～300ルーブルぐらいしたんじゃない？

半谷：それは高いですね。

薄井：だから、『ソヴレメンヌイ・バレート』は幾らだったか覚えていないけれども。

半谷：多分、だいぶ高いでしょう。

薄井：高かったけれども、買えるお金はポケットにあったと思います。その本屋はまだあるんです。プーシキン美術館のそばです。目の前にこの頃、お寺ができた。

半谷：救世主キリスト大聖堂。

薄井：前は бассейн〔温水プール〕だった所。あの辺の地下鉄の駅〔クロボトキンスカヤ駅〕を出てすぐ、ちょっと下から行くと、Москва-река〔モスクワ川〕のほうに行って、そして、左側。

半谷：本屋があります。

薄井：でも、行かなくなったんです。あの本屋は平気で偽物を売る。このあいだ800ドルで買ったけれども、非常に大きなこのぐらいの。

半谷：いつぐらいに出た本なんですか。

薄井：『ソヴレメンヌイ・バレート』は1903年ぐらいです。

半谷：帝政時代の本ですか。

薄井：императорский の時代です。800ドルで、写真はニコライ второй〔2世〕のおめかけさんだったバレリーナ。

半谷：クシェシンスカヤ。

薄井：クシェシンスカヤが普通の服で、お姉さんもダンサーだったんですけれども、2人で写っている写真。それは800ドルだったんですが、そのときはお金があったから、これは偽だと思いましたけれども、ちょっと印刷が変なんですもん。だから、これはコピーだと思ったけれども、ないよりは本物と自分で思っていればいいでしょう。だから、買ってある。兵庫県に行っている。

半谷：あのコレクションの中ですか。あとモスクワだと、ポリショイでバレエを見ていらっしやいますが、ウラノワを見たと。

薄井：見た。『ジゼル』だったけれども。

半谷：いかがでした？

薄井：その頃はへとへとになっているから。

半谷：〔滞在日程の〕最後のほうだったんですか。

薄井：ええ。ちょっと大変だったし、いいということは分かったけれども。

半谷：鑑賞する体力がない。

薄井：そう、ちょっとね。ウラノワは上手だけど、パートナーのニコライ・ファデーチェフのスタイルと雰囲気がすごくよかったです。ウラノワがいいということは分かっているから。

半谷：こういう人なんだと確認をして、発見としては……。

薄井：ファデーチェフは初めてみるような男性舞踊師だったです。だって、フランスの宮廷バレエ団に出しても恥ずかしくない容姿だもん。背丈から

何からして。息子〔アレクセイ〕は駄目です。もうやめた年代ですが、アナニアシヴィリのパートナーとしてしょっちゅう日本に来ていました。

半谷：あとは、『白鳥』も見ているんですね。

薄井：『白鳥の湖』も見た。『ロミオとジュリエット』も見た。

半谷：結局、何を見られました？ 今あがったのは『ジゼル』、『白鳥』、『ロミオとジュリエット』。

薄井：ポリショイ劇場ではそれだけ。それから、モイセーエフ舞踊団を見た。とても感心しました。そのときに『フットボール』というのを見た。『フットボール』はすごく面白かったです。あそこは短編をずっとやるわけで、その中に『フットボール』があつてすごく面白かったんですが、モイセーエフが〔1959年に〕日本に来て『フットボール』をやったときは全然面白くないんです。

半谷：何が違うんですしょう。

薄井：昨日も人に話したんだけど、演劇とか音楽とか舞踊というものは、土地の影響を非常に受けるので、その土地でやると面白い。けれど、土地を離れると、駄目になることがあります。『フットボール』は、だってサッカーでしょう。サッカーは日本では当時あまり一般的じゃなかった。でも、モスクワは *болельщик* という言葉があるくらいフットボール気違いでしょう。だから、土地に合っているんです。

半谷：それは観客の反応が演者に反応をもたらすということですか。

薄井：分からないです。バレエのことを言って申し訳ないけれども、ファンシー・フリーというアメリカのバレエがあります。

半谷：バーンスタインが作曲した。

薄井：3人の水兵とストリートガールの話なんだけれども、日本で見たらくだらないけど、ニューヨークで見たらとても面白いの。

半谷：たとえ引越し公演でやって来ててもですか。

薄井：私にはそう。

半谷：あるかもしれませんがね。

薄井：個人的な意見だけれども、京劇もそう。京劇も中国で見れば非常に面白い。音楽も耳に快い。だけど、日本で見ると発声が不思議です。ちょっとストレンジですよ。でも、北京で見たらすごく面白い。レコードを買って帰ろうと思ったくらい。

半谷：不思議ですね。

薄井：何か影響があるのよね。でも、これは私だけかもしれないです。

半谷：いや、観客が冷めていると、やるほうは当然ながら違ってくるので、観客の反応はあると思います。

薄井：ある程度。

半谷：でも、そういう意味でいうと、モスクワで見た例えば『ジゼル』などのバレエは直後に日本に来ていますよね。

薄井：そうそう。

半谷：モスクワで直前に見たのと日本で見たのとでは、印象に差はありますか。

薄井：演目が違います。日本では、全幕のバレエじゃなくて短編でした。全幕のバレエはやらなかったんだもん。

半谷：そうでしたね。

薄井：短編でいいものがいっぱいあることが分かりました。私のバレエの付き合い方、知り方の関係からみると、全幕バレエは19世紀のもので、20世紀になったらバレエはどんどん短くなるんです。だから、長いバレエは少し難しくてヘビーで、『ロミオとジュリエット』なんて、悪いけど、疲れていたこともあって早く終わらないかなと思いました。

半谷：そう思いながら見ていましたか。

薄井：はい。パントマイムが多いし、踊りは少ないし。よくできたところはいっぱいあるんだけど、全幕バレエは過去のものじゃないかと前から思っていた。『白鳥の湖』なんかはモスクワで全幕を見るでしょう。日本では2幕しかやらないのに。

半谷：2幕だけですよね。

薄井：だから、ああいうものは全幕でやったほうが音楽もきれいだし、いいのには思いました。それでも自分の理解する『白鳥の湖』とモスクワに残っていた『白鳥の湖』とは違うところが随分ありました。例えば、大体、第1幕でトシューズを履いている人は2人しか出ない。あとの踊りの人は全部かかとのある靴です。今はそんなことないですよ。だから、そういう演出だったんです。

それはそれできれいでした。だけど、過去はこうだったと。『白鳥の湖』は知らないバレエじゃない。何となく知っているし、2幕だけは57年に行く前に随分、外国から来てやっていますから。

半谷：それとの比較で57年にモスクワで見るということですね。

薄井：そう、そう。古めかしいと思いました。でも、古めかしいと言っても悪い意味じゃなくて、これがオリジナルに近いんだと思いました。解釈してある場面はすぐに分かります。最後がハッピーエンドになるから、これは原作とは違うと思いました。

私がびっくりしたのは57年の後に一度も出会わないんですが、最後にロットバルト、злогений が死ぬ、ジークフリートに殺され時に羽根をもがれる。片羽根をもがれて、ちょっとのたうち回るんです。それが鳥の動きそのままなんです。これができるには、鳥の羽根をちぎって実験しなければできなかったろうと思いました。それぐらいの迫真力がある。でも、それをした人はその後1人もいない。だから、そのときの人が自分でやったか、そのときのディレクターがそうしたか、どちらかでしょう。モスクワではそういう発見もありました。

半谷：モスクワでの発見でいうと、薄井さんの出発点のディアギレフのロシア・バレエにつながるものは、何かありましたか。

薄井：全然ない。

半谷：全然ないですか。やっぱり違うものだと。

薄井：57年は誰も何もいません。

イーゴリ・シュヴェツォフという人がいます¹⁰⁾。シュヴェツォフは、戦争前の1930年代に『ボルゾイ』という自分のバイオグラフィーを〔英語で〕出しました。副題がついていて Russian somersault、とんぼ帰りをしたロシアという題名がついていて、バレエの人なんだけれども、ロシアからハルビンにたどり着くまでのことを書いています。

後のことですが、突然、劇場の中でロシア人に捕まって、私はイーゴリ・シュヴェツォフを知っているが、あなたも知っているかと聞かれたことがあります。でも、57年はなかったと思います。だから、57年は初めてロシア・バレエをこういう形で、自分が所属する大劇場で全幕のバレエを見るんで、その感激はありました。

半谷：ロシア人にはこういう面もあるんだという抑留の時と違う発見はありましたか。抑留のときは捕虜、友好祭のときは国賓と書かれていますけれども。

薄井：本当は国賓とまでは言えないけれども。

半谷：待遇が違うことでロシアに対する感覚は変わるものでしょうか。

薄井：ロシア語にはののしり言葉があるじゃない？

半谷：あります。すごいのがあります。

薄井：何種類もいっぱいあるでしょう。57年は1回も聞いたことがない。それが一番印象的でした。だって、毎日100回も聞いたのに、全然聞かないんだもん。

半谷：それはロシア語ができる方の印象ですね。

薄井：ええ。それから、57年に出会うロシア人は、ロシアには酔っ払いが多いと思うだろうと聞く人が随分いた。だから、みんな気にしているの。そんなことはない、酔っ払いなんて見たことがないと答えていたけれど、随分いろんな人が言っていた。それから、57年のもう一つ印象的なことは、Подмосковные вечера [モスクワ郊外の夕べ] という歌がありますね。あのときからはやり始めたの。

半谷：それは聞いたことがあります。

薄井：あの歌はいい歌だけれども、こないだ新聞にも出ていたよね。ヴァン・クライバーンの話だ。ヴァン・クライバーンという人はピアノが駄目になって、大統領官邸にロシア人が来たときのゲストで呼ばれて弾いたのが、Подмосковные вечера だったという話が何かに出ていた。あの歌は印象深いです。57年を思い出すもん。

57年のバレエのプログラムは、何枚かは兵庫県にあります。

半谷：目録は見てきました。多分これは行かれたやつだなと思いましたが、『白鳥』と『ジゼル』はプログラムがありました¹¹⁾。

薄井：特別なプログラムで大きくて、このぐらいの2つ折りかな。2つ折りで、友好祭のマークが付いています。

半谷：あとは、レニングラードも行かれています。2日ぐらいですが、こちらは何か記憶、思い出はありますか。

薄井：2泊ぐらい。

半谷：多分、それぐらいです。基本的な観光地を回っているようですが。

薄井：もしかしたら噴水の公園？

半谷：行っているはずですよ。

薄井：ペテルゴーフ。

半谷：ペテルゴーフは行っています。

薄井：ペテルゴーフはまた後でも行くからごっちゃになっていて、それから、もう終わりのほうでくたびれているし。

半谷：当然ながら、モスクワのほうが印象は強いだろうと思います。

薄井：野外スタジアムでバレエの公演があったんですけども、それはレニングラードだったかもしれない。モスクワだろうか。プログラムには Галина Уланова, Умиравший лебедь [ガリーナ・ウラノワ、瀕死の白鳥] と書いてあるけれども、それはなかった。

半谷：というふうに記憶があると。

薄井：ええ。それから、そのときに野外劇場のスタジアム、スポーツ・アリーナですよ、そこで Каменный цветок [石の花]、あれの一部分が踊られました。キーロフ・バレエです。

半谷：そうすると、レニングラードなのかな。

薄井：だから、それがレニングラードかもしれない。キーロフ劇場の前はバスで通りました。

半谷：通っただけですか。

薄井：これかと思った。通訳の人がドゥジンスカヤやコンタンチン・セルゲーエフに伝言はないかなんて言うけど、そんな恐れ多いことはできませんって。彼女は伝言を口実に行けるから、女の通訳だったけれども、そういうことをしたいわけ。

半谷：役得ですね。レニングラードから後はまた電車でずっと帰ってきます。暇だったという話はよく聞きますが、帰りは何もありませんね。

薄井：暇だったです。

半谷：そこ¹²⁾にも書きましたが、シベリア亭という寄席があったのですが、薄井さんのご記憶は。

薄井：あまり。

半谷：ないですか。

薄井：うん。

半谷：帰ってこられてパジャルスタ会の結団式のようなものが、新潟県の越後湯沢の温泉で、芸術代表が1泊しているんですが。

薄井：あまり覚えがないです。

半谷：覚えがないですか。

薄井：ええ。私は急いで帰ったかもしれないです。大体、ポケットが空なんだもん。江口隆哉先生の秘書の方、後で奥さんになる人、名前は忘れたけれども、その方に借金をして帰りました。

半谷：新潟からの帰りのお金ですか。じゃあ、だいぶ大変ですね。

薄井：だいぶ大変でした。

- 半谷：細かいことですが、東京に戻られたのが26日か27日のはずです。
- 薄井：8月の？
- 半谷：はい。ポリショイの〔来日の〕東京公演の初日が8月28日なんです。
- 薄井：そんなに早く？
- 半谷：ええ。何回か行かれているんですよね。
- 薄井：何回も行った。初日から行っているような気がする。
- 半谷：だから、不思議だなと思ったんですね。モスクワに行く前から日本に来ることを知っていたのか。どうなっているんでしょう。
- 薄井：あまり覚えていません。
- 半谷：かなりいろんなことが並行して、この時期に、57年の夏に起きていますからね。
- 薄井：1枚ぐらいい切符を買ってあったかもしれないです。でも、立ち見は500円だったから、あとは立ち見でした。
- 半谷：もう一つ、これは薄井さんが今年のポリショイ・バレエの来日公演のパンフレットに書かれている話ですが、翌年の58年に来日したニューヨーク・シティ・バレエはがらがらだった。
- 薄井：本当にそうよ。
- 半谷：だから、日本にとってのバレエはポリショイ・バレエということになる。57年のバレエは日本人にとって、そんなに印象的だったんですか。
- 薄井：そうですね。
- 半谷：薄井さんはどうなんですか。
- 薄井：それまでに来た人たちから比べれば、ロシア・バレエのほうが技術は上だなと思いました。だって、それまではほとんど寄せ集めのグループだもん。最初にスターだけ4人来ただけけれども、それは別で、あとは寄せ集めグループで来たんだから。でも、さっき言ったアレクサンドラ・ダニーロワ、ああいう人はモスクワにはいなかったよね。
- 半谷：ということは、モスクワは教育をして非常にレベルは高くなっているが。
- 薄井：高いです。
- 半谷：それはバレエの中のある一部分をきちんとやっているだけで、違う形のバレエもいっぱいあるんだ。薄井さんの好みは、どちらかというところ。
- 薄井：そっちの方が。
- 半谷：そうですね。

薄井：でも、57年はハチャトゥリアンの『ガヤネ』のフラグメントもあって、クルド人の踊りをやっています。寝る前にいつも思いだすけれど、クルド人の踊りはよくできていた。すごく面白かった。だから、あのバレエが失われていくのは残念だと思っています。初演の振り付けはアニーシモワという女の人です。〔キーロフが疎開していた〕ペルミが初演です。開戦のときにやってみたいです。だから、ロシアに残ったソ連バレエにも非常にいいものがあることは分かりました。57年に行った時と、57年のポリショイ来日の両方で、それは思いました。でも、ちゃんと気を付けて見ればよかったと後で思ったのは、レオニード・ヤコブソンのバレエ、それと民族舞踊、この2つです。

でも、もしかしたら、ポリショイ・バレエの公演には、カシヤン・ゴレイゾフスキーの作品も入っていたかもしれない。ずっとソ連バレエを眺めていると、鑑賞に耐えるのはレオニード・ヤコブソンとカシヤン・ゴレイゾフスキーの2人です。

半谷：主流のグリゴローヴィチでは駄目だと。

薄井：駄目です。バレエのことになって申し訳ないけれども、3～4年前に、もうちょっと前かもしれない、『ニューヨーク・タイムズ』が年間に10冊本を選ぶんです。年間ベストブックス。バレエの本が1回、それに出了ことがある¹³⁾。『ニューヨーク・タイムズ』の基準は、一般の人の教養として読むべきもの。その中にバレエの本が1冊入るんです。“Apollo’s Angels”というんだけど、面白いところがいっぱいあります。くだらないこともいっぱいあるけれど。女の人が書いていて、歴史を非常によく調べています。

バレエの歴史の本としては、初めて書かれたようなこともいっぱいある。その中に、ソ連のバレエは、あれほどくだらないものに精力を費やして、芸術の墮落、悪徳だと書いてあります。

ジャパン・アーツによく言うんです、グリゴローヴィチのバレエばかりやるから私は嫌ですって。来年はマリインスキー劇場が来るでしょう。やるものがないとジャパン・アーツは言うけれども、何をやるかが問題ですよ。

半谷：いや、本当にすいません。5時間も延々と。

薄井：そろそろ疲れてきた。

半谷：さすがに私も。どうもありがとうございます。

注

- 1) 八木下弘『ソビエト民衆の表情』(三笠書房、1957年)。日本代表をナホトカで出迎える群衆のカラー写真が表紙になっている。
- 2) チーホアケアンスカヤ〔太平洋〕駅は1953年の建設。港から長い陸橋を渡った先にある。出迎いの群衆は船が着いた港の光景、薄井さんが記憶するのはチーホアケアンスカヤ駅の光景だと思われる。参考：長瀬隆『ヒロシマまでの長い道』(晩聲社、1989年)、31～32ページ。
- 3) Мы подружились в Москве. (1957) <https://www.net-film.ru/film-4879/> 6分35秒から40秒にかけて。
- 4) 川尻の友好祭の回想は、次の文献に所収。川尻泰司(編)『現代人形劇創造の半世紀：人形劇団ブーク55年の歩み』(未来社、1984年)、175～179ページ。
- 5) Искусство друзей. (1957). <https://www.net-film.ru/film-4810/> 薄井さんたちの出演する「鹿踊り」は часть 2冒頭から1分20秒ほど。この記録映像には、このほかコンクールで金賞をとった日舞の市山松葉の「鷺娘」、8月6日夜にマネージ広場で行われた「原水爆禁止集会」の様子が映っている。
- 6) 1958年1月24日に独立映画社が受け入れ(一般公開はなかった模様)。題名は「第六回世界青年学生平和友好祭記念映画」、上映時間は56分。国民文化調査会『左翼文化年報1959年版』(星光社、1959年)、184ページ。
- 7) 薄井憲二総監修、芳賀直子監修『兵庫県立芸術文化センター薄井憲二バレエ・コレクション：目録』第2巻：書籍類・雑誌(兵庫県立芸術文化センター、2013年)、41ページに当該書がある。Красовская В. М., Вахтанг Чабукиани. Москва: Искусство, 1956. このほかに平和友好祭の滞在中に購入したとおぼしき本は、Сандлер А. М. (ред.), Танцы народов СССР. Вып. 3. — Москва: Искусство, 1956; Кристерсон Х. Х., Танец в спектакле драматического театра: учебное пособие для режиссерских факультетов театральных институтов. — Ленинград; Москва: Искусство, 1957 (以上二点は目録86ページ); Филиппов В. А., Медведев Б. Л., Театральный музей имени А. А. Бахрушина. — Москва: Моск. рабочий, 1955 (目録91ページ)。
- 8) 「さよならアンドレ」と題した薄井さんの追悼文が「井上バレエ団」2009年12月公演プログラムに収録されている。
- 9) 外国人からモノを入手して転売する闇屋(фарцовщик)は、モスクワ平和友好祭をきっかけに広まったと言われる。日本の週刊誌報道も参照：「貧しき百五十人の旅行者：友好祭代表団始末記」『週刊新潮』1957年第38号、34～37ページ。
- 10) イーゴリ・シュヴェツォフ(Игорь Швецов/Igor Schwetsoff 1904–1982)は、

1920年代末に亡命してニジンスカのバレエ団やバレエ・リュス・モンテカルロに参加している。1941年からアメリカに移り、ニューヨークで亡くなった。

- 11) 薄井憲二総監修、芳賀直子監修『兵庫県立芸術文化センター薄井憲二バレエ・コレクション：目録』第1巻：プログラム・バレエ台本（兵庫県立芸術文化センター、2012年）、127ページ。そのほかキエロフ・バレエとマールイ・バレエのプログラムがある。
- 12) 梅津紀雄、半谷史郎「『邦楽4人の会』の誕生：オーラル・ヒストリーの中のモスクワ青年学生平和友好祭（1957）」『SLAVISTIKA』第32号（2016年：発行は2017年7月）、191～212ページ〔シベリア亭のことは203～204ページ〕。
- 13) 『ニューヨーク・タイムズ』2010年11月26日付。